

北槎聞略

卷八

和書門			
一八三〇一	一七	二八	類
函	架	冊	
一〇	枚	軸	

內閣文庫			和書
一八三〇一	一七	二八	類
函	架	冊	
一〇	枚	軸	

(一八)

內閣文庫	
番號	和 18301
冊數	24 (8)
函號	185, 579



1857年

建隆開國

1857年

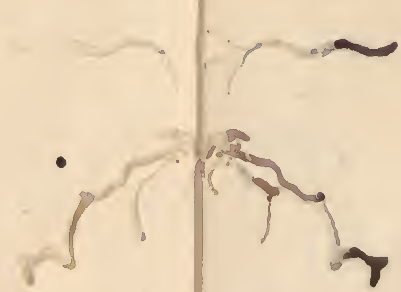
建隆開國

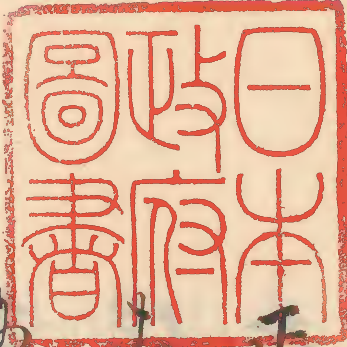
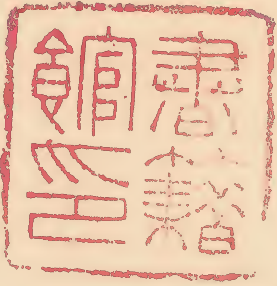
建隆開國

建隆開國

建隆開國

建隆開國

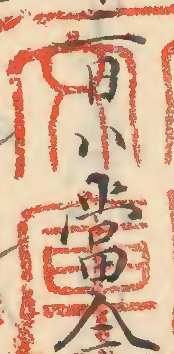




北槎聞略卷之八

淺草文庫

○年中行事



正月十日（中）常々エカテリナ（カ）の誕辰（タ）なり

（カ）をロシセニマ（シ）ト（マ）ト（ト）又誕辰（タ）ト（シ）第七日

水（ミ）不（フ）塔（ト）一（一）名（ナ）を（を）は（は）る（る）水（ミ）見（ミ）も（も）生（シ）辰（チ）同（ト）

極（キ）小（コ）祝（シ）ひ（ひ）祭（サ）礼（リ）なり（なり）これ（これ）を（を）イ（イ）メ（メ）ニ（ニ）シ（シ）ル（ル）ト

以（イ）此（コ）日（ニ）諸（モ）官（ク）人（ノ）皆（ハ）官（ク）服（ヲ）を（を）著（シ）て（て）朝（ア）参（マ）ト

生原せいげんを佳節りせつとす。國中くにち貴賤きせんと
なく祝いわひ祭まつりあり。半はんなり。太子皇孫たいしこうそんの
生辰せいしんを以もつて祭まつりふ。祝いわふ。自らみづから
生せい辰しんも身み分ぶん小せう祭まつり。いと祭まつりあり。新あらたき
衣服いふくを着き。寺てらふ。詣まかり。半はんなり。とす。
其外そのほかは七日ななひこふ。つ。日ひあり。て上下じやうげ男おとこ
女めも。小せう寺てらふ。詣まかり。佛ぶつを拜をがむ。とす。付つふ
多くおほく。婿むこをえ。とす。媳よめをえ。とす。半はん

二月ふたつきボダボダとす。祭まつりあり。ボダボダの氷こほりの半はん
あり。此祭このまつりをり。せ。淫いん雨う。水みづ等らの患わざはひ
なり。とす。其日そのひは子この河か岸ぎし方かた一ひと可か
計けい。柵さくを徒た。河か中ちゆうの氷こほりで。一ひと間ま計けい。骨ほね
を。碎くだき。孔あなを。倒たさ。お。祭まつりの刻とき。踏ふみ。其
アリ。へ。いと。高たか官くわんの僧そう。佛ぶつ像ざうを。持もり。り
寶たから鐘かね。天てん蓋がいを。と。り。と。子こを。せ。歩あ行ちゆうし。半はん

女主人因〜歩行〜きりたすふ太子
皇孫と〜〜諸官人倍従と柵の外
の貴賤男女の差別り〜群聚〜と
糸指とお氷の上の種と浦アリ〜其
上お坐〜〜良之〜〜誦短〜〜後
彼りり碎たる氷穴の内おを〜
これ攬〜浪盤を〜と氷を汲上
侍者ふ〜と持〜櫻櫛の毛を束縛

長と一尺計〜造〜〜糸第の〜き物ふ
銀盤の〜お蘇〜女主人の〜権〜事
〜し〜太子皇孫諸官負お権項し
〜後侍者のポロトポ〜柵のゆ〜持〜と
群聚の人〜お〜〜〜権さ〜と
は自お民〜もお家毎お寺〜と〜傍
徒身件のおを持来〜家内大小〜
〜〜〜〜〜身〜お〜

百餘人を一とせしめてせしむるに死して
第七日小波石櫃自然と寺中より湧出
空を凌ぐ天小昇於今ふるにすま
其教法を奉崇せしむる其日を祭日
奉りしむる極の貧賤なる者も
此日新衣履を着酒食をまけ
七日間家業を止め遊びしる寺
詣りて楽せしむる中

此方忠正月のことしとてわしにわたりて
尊信より輩は此日の四十九日以前
潔淨めと髪を梳ぎ衣履を改め
毎朝寺ふり酒経しと帰ぬれば
この日の七日計以前より親族朋友
のふりしる暇をふりしものゆ
慶吊をり通せん寺ふりの外は禁足
めと戒をち中なれくの月事

七日のうらふ井——おく申がうとを
おまけうの第六日ふあう夕方ののみ
中若ともおのくらの寺ふ切内堂ふ今
作業と悉く懺悔——七日ふあう日ふ
髪を梳と新衣と改り早朝より寺ふ
切と讀經とさく寺ふ衆僧と集免
大抵お四所以下——誦經——前日懺
悔——若きを内堂ふ今住僧

足臥戴り——あち午後酒一盞と交の饅
一塊と興ふと——いふじこのやうと
懺悔を殊せ——若ければ住僧悟と
足をとせと宗門の者、最これと慚愧
とり中がうとを祭七日の間ふ
跡場親場等何り園と寺くを
りひ死くと遊覧何りなり皇子
皇孫とと——高貴の人く車

亦と遊びわたりては親戚等の世
此の方三丁計あり其内小程の雑戯
とばし餘は所の群聚ありも夥し
光太又り切り対は其地の四方と興々
六重小より圍しとあり雑戯の外
鞆鞆河り又大がら平鞆を造り其の
輪の周り小人を立せしとあり
或は徑り三間計なり車輪のわたり小

橋小橋軸を多くし其軸小人を追
ら坊機で廻し廻せば其人車輪
後上下とれし追ふ軸がら
其體考ふ平より外博奕頭
等何れと甚めきりきまらざる
り也
四月の内小三ライとて聖僧の祭あり
當日其像を飾りて讀經するのみ

は傍に原をムスクワの人かりケイルコツカ
ありと遷化を今ふむと六百餘年其
屍朽と壞れず嚴然としてせり
如し其遺骸ハイルコツカのバイカル
の湖の邊あり信仰の輩は遠く
此の地へ行きて拜せり

七月三日ハ王城より二十七里ペトロゴ
地の花園あり中奥の祖ペトル誕辰

祭あり此地にむし毒蛇住む
人遂に物り半かりし
馬上あり此地に幸り彼毒蛇を馬蹄
より踏殺し花園を開けり
園中小大池あり地中小噴水を
其制ハ池中を美石ありたみ人物鳥
獸を造りおの其口より水を噴或
年小棒より音ありあまきやその

精工のそんごり比のふと烟花
と燃し多く踏理燈を點と尤この
噴の祭の口又の國王遊覧の時のみ仕
をりがり噴激しと上射り半一
丈七尺ものも壯觀なりと云
同月ゼンスコイマナシテラといふ尼寺ありて
法會のいり寺号のアレキサンドル子とスコイ
マエゼンスコイマナシテラの尼寺といふ我

王城より三里子の河岸小造りうけ
るお寺なりソール勅願寺 才で二里半
餘のふ道の正中小幅七尺高さ一尺計ふ
厚板を鋪りの上小壇をき又其中小
白布をしき釘をうりかき免の
間横道の死のうりもげふして御
本のおかふりしるふ設けし儀
仗の次中先小神の廣き赤色の服ふ

金の縁をとり金の帯ふ金の荷包を著
たふ童子四人おのゝ旗を持て二行ふ
く川舟のあしふ拂郎察圍の扱を著方
小童數十人蠟燭香炉を持てく川舟の
次ふマッコノといふ僧ボホマレといふ佛像
杖捧と立付てきとありへい黄金
あくと鑄より双頭の鷲の高さ五六寸計
がたて其堂のすゑと捧く是とらら

本國の號章小月形物と傳國の
寶なり頭ふ天子の冠を戴した小地
球を捧ふたふ笏と執る状なり
おし外ふ重さなありこいそとを
たお汁あり大執りて持たり
こいそ衣の裾を侍者二人あくら
銀あり造り十二枝挿の燭篋を持
たふ侍者一人ホソクと笏杖をもち

これ侍者一人あたふと後ふいびりまを
飾りし帽子と具室ふとまを指すに
侍者一人は杖と帽子の國王より賜は
ぬりし又より四五間偶と女王とより
太子皇孫何しむおむりしよりよは
百官扈從しとソールと移りて
ソールありと大法會あり其況の國王
ツワルスコエセロお居居らるりけり

真前日ペートルボルグおゆり當日お明
アレキサンドル子ウスコイお行ソール
おけり法會終り即時ふツワルス
せおゆりおけりおしお太子孫
留り仏像を守護しとアレキサンドル
子ウスコイせん送りておけり
十二月二十四日王子ラルヘルトマルの
祭ありお官人三員あり年々輪あふ

此軍と成りたり。此祭の料も俸銀の外
千五百人の禄を賜ふ。千五百人の禄も千五百人
此方より死人扶持と。其祭の式の本より三座
山を祖として其より衣服袴褌脚護領手
巾指の物を夥しく打り付けおさねり
国王も奉慰あり。高樓小登りと宴を催
され。未の刻より小號の鐘をかくせし
先若貴賤より混じりて其品々を争ひ

まゝ山をとりたり。俸も取り去りたり。
其其年順の家も故障あり。本年は
延びたり。光大より又より。此
去年官軍より。都尔格国も行く。翌
年ゆり。光大より。此祭の
ゆり。又此より。年内七日の間
ノイゴートブラゲンと。新年を迎へ

祝の紙ついでなり子河の氷の上を木履かきを
巻まきとまきる半はんがり木履かきのうらふあ珠たま
めと半月はんげつ形の齒は堅かふ一い道だうなりまは
踏ふみと氷の上をいもも行ゆかりのあは
巧こう拙せつなり男女なんにょもも髻むすふふシシ夕ゆふ
のの危あやここりりししきと結ゆい付ふ走こるあ扱あふあ風かぜ
翻ひらふと壯さう觀くわんととすす會かいととららびびらら者
とと大だいききふふ笑わらひひのの一いふふをを其そのにに海うみ

河岸かきふと價かひををととりりとと木履かきををかかと
もの河かと貴族きしやくの夫人ふじん娘むすめののもも也や
先ま守まもりりのの内うちのの木履かきととアア帳ちやう
挑たかくととふふふふ走こるるかかりり面めん并へいと
尺しゃく徳とくとときき祝いわととききままりりととをを

梅うめふ明人めいじんの圖説ずていふ熱あつ尔に馬ま泥どろ亞人あじん多おほ
于こ氷こ上うへ用もち一い種しゆ木履かき兩りやう足あし踏ふ之の一い足あし立た氷こ
上うへ一い足あし從より後あと擊う手て之の乘のり滑すべ勢いき一い激げき數かず丈だけ其その

行甚速^{クハヤシク}手中尚不廢^{ハナラズ}常業也又乾隆
御製集^{クツク}不國俗有^{ヒマツキタル}冰嬉者^{ゴスルニヒサラ}護膝^{シカワラ}以^シ蒲牢
鞵^{クツク}以^ス韋^ス或^ニ底^{ソコ}舍^ニ雙^ミ齒^ミ使^ラ齧^{カミテ}凌^{アツ}而^{シテ}人^シ不^ラ
踣^{タラシ}焉^ニ或^ニ薦^テ鐵^ヲ如^シ刀^ニ使^テ踐^ム冰^ヲ而^{シテ}步^ム逾^ト疾^ク
とふもの即^チ乞^{ガリ}母^ノ松^ノ前^ニ
あとも氷雪の竹^チ峻^{ツル}坂^ヲを^シ走^リ下^リふ^ル走^リ
る^ルを^シす^ハ早^クし^テ云^フ甚^ク速^ク疾^クなり^ク巧^ク
捷^クの者^ハ木^ノ屐^ヲを^シ著^キて^シ走^リり^カつ^ト

顛^{テン}信^{シン}せと小^コ兒^ガの^ノ竹^チを^シ踏^ムり^テ
これや^ハお^ハふ^ルも^トも

年中^ニ七日^ノ毎^ニムス^カラ^トと^シム^ル事^ナり^ク
其^ノ不^レ浮^キ梁^ノの^ノ傍^ニあり^ク三^階造^リり^テ其^ノ
大^ノ家^ノあり^ク房^ノ敷^キ上^下百^十六^房あり^ク其^ノ
二^階あり^クムス^カラ^トと^シム^ル事^ナり^ク
其^ノ日^ハ皇^子皇^孫と^シし^テ其^ノ諸^ノ官^人卒^人
て^シる^ルう^り交^リり^テ何^レも^シ面^ヲ折^ルと^シは^シみ

外国人島夷等の形ふ打扮日暮りて
より集り彼廣里舗と称す坊屋と
何れも半かり座中酒菓子等を
願房何れ其内めと酒菓子等を
かり此家常に空屋めと官より番
率をとつてせむもあつりムスカラト
あつり八月の銀五枚也と先此屋乃
修繕料ふかり半かりとせ何の為

あつりしつふ半とあつりしつふ
行者も面をつつみ形をかえり半
かり光たえり毎夜此方の披をかすれ
し是

梅もよ面折とかつり形をかえり
つらつと諸官人の善悪政事の得
失等をとらへり又其風説と
人あつり節と改り行と性

たえあふも何しん終

春冬の間に國王ツワルスコエセロ（雪見）
しかりし申あり國王をとりし皆と櫓たきの
多ありしかりし女主の櫓馬二十匹あり拽
あし供奉の官人十人女官十人何もしり小
櫓乗十人けし西側ありて行きの櫓
國王の櫓の後うしろ程ほど絨じゅうの大綱おほなづなを二條ふたぢょうけ
其綱なづな糸いとごとく拽ひたるがかりし女主の輿こしを

前まへの方かた法ほう剃は後ごの方かた腰こしけ何なに熱あつ所ところ
天あま鷲じゆ絨じゅうを以もつて裘かみなり輿こしを載のり
櫓たきの長さ二間にま許ほ廣ひろさ四尺しじやく餘あまりり供
奉ほうの櫓たき三尺さんしやく計けいあり腰こしをたるるまじの
没もつかり國王こわうの貂しゆ皮ひの裘かみを著きけ同おなじ
半はん衾きんをたるるレレニニ夕ゆふを摺すりかきかきかき
帽子ぼうしを戴かぶり女官にょくわんもあひあひあひの帽子ぼうしを
きりきり其その何なにととり太子たいしの輿こしを立たて

キタイスコネ^{支那}より来た銀の壺のみ
づらをつけるる苦み入熱湯とさし泡茶
ふしとのい先も多し砂糖牛乳と
かゆりり^{賤人}の蓬藁の葉を乾し
茶ふうの用印茶の價の百枚より銀一枚
より五枚おむる大抵朝饌の昼は食ふ
饌前^{おかり}酒とのい下物^{敷種}
砂糖漬蜜漬の菓子やしの乾魚^鱈鱈

イガラとよみ魚の子は醗藏せし胡椒
と和し食ふ酒は皆焼酎なり其内カル
拂郎察より来るプシエといふ酒を上品
とよみ又フランス多ツカとよみ此酒
氣味甚烈し其後あるの先口中
爛る熱湯半分件の酒二分を合せ
砂糖をかきとのいし葡萄酒を月
半先も他はより来る貴人の

平常の食饌七八菜より十四五菜まで
なり容を清く又祭祀の饗饌も
數十菜ふるふ新肉の大塊小きく 雞鴨
の類は皆全煮全炙かり 醬油味噌の
がきぬつても塩煮塩炙がれり烹調
極りと炙ふと味勝しく 諸品は
多く砂糖ボウルどかふ魚鳥の類は腹
の内小葡萄白梅柑子等の砂糖漬又米

麥の類を実と煮て食すは 倉標六尺小
四尺許尤大小一様りと 標面は白き綾
紋の布とけ 賤人の白布とわりと 四
方小櫓や置饌小徳むけふとを洗い口を
漱きと櫓は洗く 標上は一人毎七八寸
計りの浅き皿と深き皿と二枚かこひ大夾と小
夾の大小饅頭福餅焼餅もの一塊置
其上は方フタとして白布の方二尺四寸計

かり手巾を小く菱形ふたきみとけ
おの向の方小刀を横おきたる方小匙
左の方小ヤと置酒盞と添とや金置
酢油塩胡椒芥ボトル等を各器盛と
標の中央小標設と各地の多く銀器磁
器并りとし新肉諸禽全のやとと
小盛と平日家内計の食事小妻子
のゆくとたしく肉野菜も一種は

人数小合せとさかしく小割分は客を拓
け主人の子又は席中の少年の者これ
割り小刀匙ヤとさりのち田舎より布と
お返し胸より膝よりけ上の端と獲領
の間小しとみとあふく女小襟のあふて
針とさしとさし先は食也とと衣被と
汚さばさしとさし拭い降むるなり

お上をたより返す二枚のさしづり上を
皿を一件の肉菜でうけおのく食能
かたふ小刀あききり塩胡椒油の類好
みせぬ酒和し食ふなり一種合畢ハ
了外の品をさきり口尻兒色あくる
かの如く一種毎小近侍の者皿を洗ひ
拭ふその内小踊りする下の皿あき肉を交
引替へ洗ふ丸汁の類ハ深き皿あき交

おがり汁の類ハ銅鍋小入火盆のよき物
焼酎を蘸しする綿をいれ火を点し
煮ると餅小ころし標上ふと急匙を
盛りつけ汁をいれ匙あきとらひ器
かこのもち寒気を防ぐ為ふさし
こめする屋がれがけハ煙氣あり火
煙室中ふこりりと堪へすお焼酎
の火をとりあがり食中ハ酒ハ敷巡

免られかり大抵平日上菜の順次は最
初小臘乾焼餅次小雞の汁次小牛肉
次小魚の湯次小麩粉を糊のどく
福り団くく免れかり牛乳をこのけ
た家次小厚の金灸をわく小稀き粥を
啜るに後ふくく心く小洗口
漱きこくこのみ烟草を喫ひ席を
退く食後ハ上下とも小一寸汁寝る

かり貴人の宴會ハ饌中樂を奏し
に後舞踊等あり又下賤の者ハ
焼餅小麩肉魚肉の類一菜かり蘿蔔
とハせあり塩をつけ下酒小食小酒ハ
変あり造りくるピワとく酒かり食
品湯の折木の餅あり匙ハ銅又木
造りくるをりあり牛ハ上下とも常
食かり毎日小穀く屠ハせかり

牛の飼育は牡牛よりも牝牛の子を育し
乳とすゝめぬ殺すはふとせ牛とすゝ
商人の諸方より多く富貴を
家にお牛羊より見雁とすゝお
されも都より自家用の鳥
新にもふとすゝ殺すはふとせ
屠宰とすゝ処のりぬのふつれは
殺すもるがやう何ふもるの價十二銭なり



すゝと都下の諸品もるる價がれも自中
お并もるる食物甚し牛肉プレート四百五
百文
みく價四百五十銭五百銭なりシビリもる
七十十銭ふとすゝ愛の粉プレートし都下
二百五十銭シビリもる十九銭二十銭
都もるの價諸品もる救信なり

○酒

酒の數品より葡萄酒の製法詳なり火焼

酒^リ都^下の製^いの^りや^知る^べチ^{キリ}

カ^ムシ^マツ^カ ボ^ルセ^レツ^カ ペ^{トル}ガ^ラニ^等あ^しは^ん

醸^つ法^ハカ^ブス^とら^ふ草^と夏^の内^ふ刈^らう

細^くふ^さき^乾置^別ふ^大麥^の粉^と水^とを^和す

し^四斗^樽に^り桶^を先^たく^草と^一重^と

か^な其^上ふ^ゆし^る変^形と^一ま^あき^しま^し

乾^草と^まき^変形^と置^筆を^もか^の

如^く暖^めら^ふ安^部一^四五^宿と

瓶^と酸^味を^せし^ふを^しら^ぬは^ら釜^上

く^と蒸^すと^甑桶^のこ^と深^く造^り横^ふ

孔^を穿^つ洞^を桶^の柄^をし^らぬ^柄の

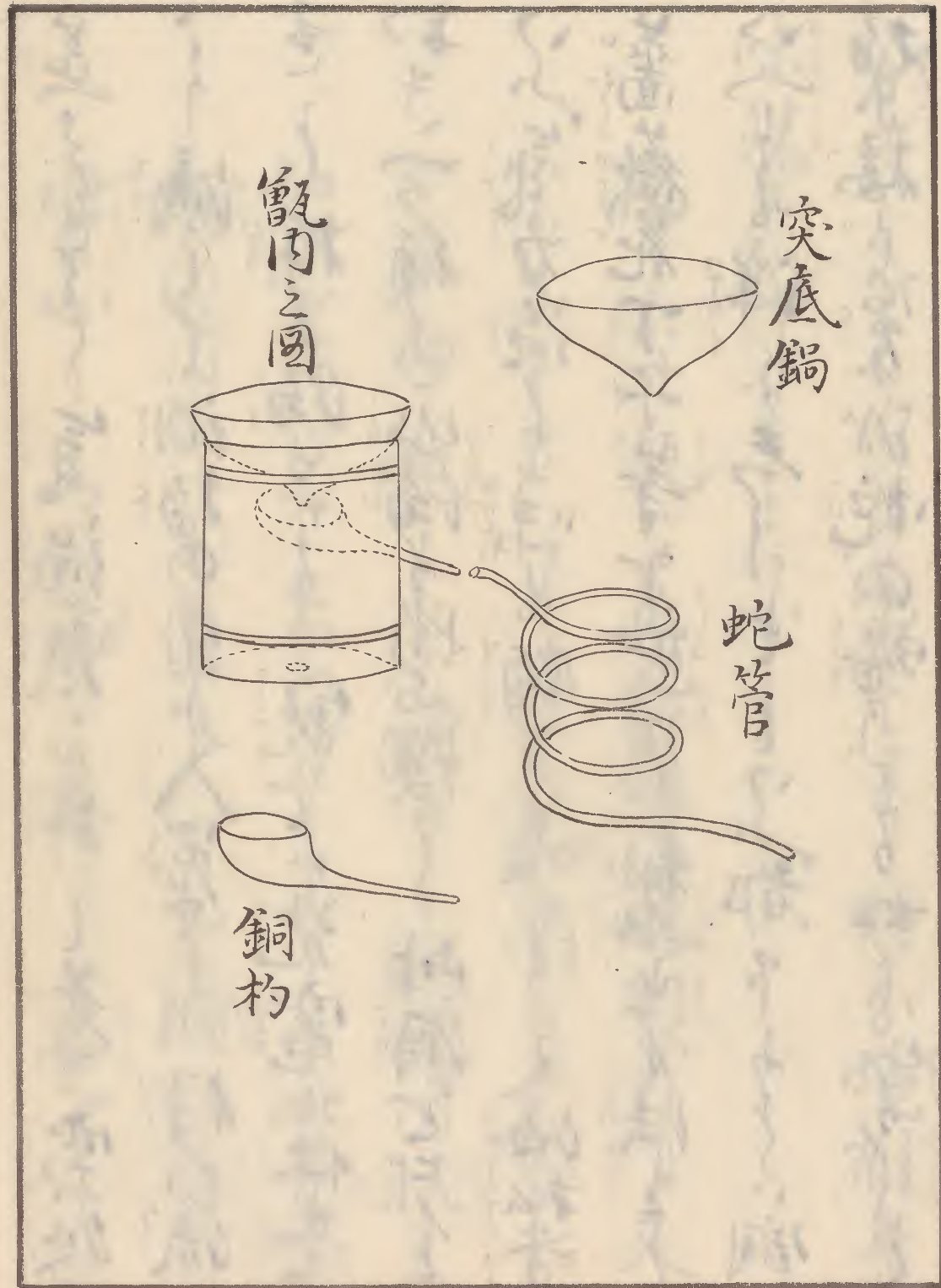
を^と穿^つ造^りし^るを^と志^の孔^のら

し^ら外^にし^らし^ら筒^の先^を六^尺計^の

洞^を接^しら^ぬ桶^の口^をし^らぬ^口

甑^の上^を底^の突^きる^鍋冷^水と^湛す

安^と甑^下火^を焚^けら^ぬ中^の草^麴



蒸すもよく 氣漏底ふ昇りし若き突処
 より滴して 汲桶の巾ふ入るまじり 傳ひ流
 きと 柄ふ湯がけり 醜をいれ電も仕を
 おき一ツ柄ふ 承溜る柄ふ後く 此酒とビロと
 不氣力淹く 味も頗るまじり又海松子
 薔薇花下子等を加つて 製成せる法を
 一ともし 洋ふ者しともし 京都下ありと 銅
 柄ふ接ぐ 室に蛇の蟠りあり如く けりくと

巻るるをりりみ 是をそそりたる 焼酎を
 味殊ふ 烈しきとふ

扱ふ此甑の 蒸露罐の 略制りり又
 けりし 若きたる 常なる 和蘭酒と スラが
 とも即 蛇とも 語りて 蛇蟠の 状を
 如きと 認めと 名つけし けりし 此酒を
 柄の内ふりし 上下の口と 柄の外ふ
 穿せし ぬの 漏るる けりし 茹をりり

桶おけ中なかの冷水れいすいを湛たみえ上うへの口くちめく甌いさの
滴たみを交まじれい滴たみの処ところの燒耐件しやうたいけんの蛇へび足あしは
内うちを焚たきく下したの口くちめく冷水れいすい
の中なかと通とほぐせりな即時じじふ冷ひやく
酒氣しゆき真まに耗散こうさんせりふより味あじり
甚しん烈れつなり寸すん母ぼと和蘭わらんの露る水すいは
制せい必ひつずの香かう氣きわりのふいぬと入い入い
蛇へび足あしをとりかきり本ほん文ぶんのとき蛇へび足あし

とらりゆりる冷水れいすいを浸ひすも其
切きりぬす只ただの昔むかしのみとて
月つき法ほうを以もつて見みたりし

又また賤いやしき者の月つきの口くちめく酒しゆの口くちめく先まは
此こゝ方の濁かき醜しゆうのときものなり先ま汁じゆ
許ゆるり入いぬき瓶びんの下したの方かたのみならと子
蔓草まんそうの葉はを乾かしうを底そこふ後あと
麥あわ粉こなの禰ねりうを草くさの葉はしうきせと

瓶の八角目があふつあふつと押しつけ其上
氷を入仕入置一昼夜かゝるか取也
のひらりをめき酒をうるに初め酒を
ひの色茶の如く味甘く後を漸く
色味もゆるゆるぬがり此酒は彼曼州の
花をより加ふれ酒氣強く酔ふと
——とふ先は賤の者乃祭祝等此
日ふ多く造るものなりと云

フランススウィツカと云酒何佛郎察國
より来る氣味神々外酷烈と云其
果入まは皮爛も剥れぬ種と云
温湯と和しとのむらう此酒は
蠶魚に外生類を漬るに數十年と経
とも色変る損壞は事なり

○酢

車がー 風車は大抵四扇六扇と云
大造がらりのりれも風りき付の物
さばる水車の便がらふ志しどらう

○砂糖

砂糖をサハラと云ふ本國より如の物潔
白かり半雪のりも小かりの五百匁大
かりの二貫五百匁計を一塊と云ふなり
此邦氣候極りと云ふきぬ在地より

絶と此物と産せに拂郎察諸厄里亞
都尔格子メツ等より多く轉輸と
是は此方より出島砂糖と云ふ品とし其色
黄褐色かりを銅の鍋とて煎返し
河をさう銅あり上寛く下窄り
造りしは新お入次りこりたるなり
一塊とし其器よりせしるすも
形がら其候打碎き月う但再製し

たふああ甘味稍薄く 兎甲冰糖ハ
支那よりまゐるもの多く申あつたと
なり

梅^{うめ}の上^{うへ}寛^{かん}く下^{した}蜜^{みつ}がり餅^{もち}と
白糖^{しろあめ}を製^{せい}する丸^{まる}溜^{りゅう}を銅^{どう}を造^{つく}り
たらがり^{たらがり}金^{かね}一^{いち}定^{じやう}と底^{そこ}あわを
ろ^ろ金^{かね}一^{いち}製^{せい}法^{ぽう}も煎^{せん}く一^{いち}滓^{すい}を
さうさうの^の子^こあつたあつた

さやぐと一^{いち}ハ見^みる

○酪

酪^{らく}をポルトガル^{ポルトガル}と不^ふ彼^か邦^{ぱう} 日^{にち}用^{よう}のよめ
此^{こゝ}の佳^か蘇^そ腊^{らく}を月^{げつ}れと一^{いち}平^{へい}常^{じやう}飲^{いん}
食^{しょく}小^{せう}加^かく味^{あじ}を酒^{しゆ}がり一^{いち}其^{その}製^{せい}法^{ぽう}
牛^{ぎゅう}乳^{にゅう}を煮^にけり一^{いち}柳^{やなぎ}ふ入^{いれ}長^{なが}き木^き篋^{けつ}を
ふとそめんと攪^{かきまぜ}ぶ中^{ちゆう}一^{いち}時^じ汁^{じゆう}と

漸く色黄みぬ凝りたり賣買の
もの塩を加ふ塩を加ふ速く凝
り骨を省き且日経ても損壞し
と

○烟草

烟草の彼邦もバコといふ其土も
産一休邦よりも多く事上下は
甚嗜好好むなり殊小トソコイ
都尔

トヤシ多量を上品とす烟管の火頭を石
を造り皮を巻く裏の管は木をぬ
りみぬりなり嘴の角ぬり木をぬ
造り又金く黄銅又磁を造り
たれも入り海島の夷人等も亦
亦も造り烟色の布の袋入り別
烟盤等や擦上小燭と點し其の火
より造り唾壺の黄銅の鉢小石灰

入擦つづくの下ふおく又ポロシカとらふよものを
烟葉たしこと末もちとり茶物ちやものと和わ鼻孔はな
おが許せと花紗はな入いと吸納すいれは
氣きと開ひらき壱いちを散ち嚏くしゃみと催もよほ眠ねむ
覺おぼと中なか火ひを中なかのふ勝かち支那しな鼻はな
烟たばこり和蘭のスノイフタババコとふしれを彫う岳物がくもの金銀きんぎん
を造つくり珠玉たまごと心こころ飾かざしきりえ
笑わらと早はや路ぢよものびりた下賤げせんの

者ものの淡たんのうとものふと造つくり黒漆くろしつ
とぬり或ある鯨くじらの鬚ひげと縮ちぢとほり
たぶるもなり上下じやうげとる小帯こおびと腰こし
間ま小彫こうくと暫しばめり身みをよむとが
よのびり光大くわうたいと國くにとよりのし
鼻烟盒はなたしこ拂郎ぶつらう察さつの匠たくみとり造つく
らせしきりゆめと價銀げんぎん八百五十枚はちひゃくごじゅうまい
なり

○塩

塩ハ皆山より産するものとりらゆ
即崖塩 氣味包つるふと甚上品也
カムシマツカチギリイチガヲホツカ等ハ
地ハ海塩をりらゆ海塩を下品とせ山
塩ハイルコツカより多し出る山崖の
下より雪のこころ吹出る塩更ハ加比
丹一負属吏十五人あり件の塩をとり

河つら皮俗小入法方小輸とイルコツカの
近海ハ皆此塩を日々にとて百多とて價
銅錢一文半なり

○販賣

鳥獸の肉野菜魚類等イルコツカ邊を
店を閉まるところ焼餅臘乾の如きは依
食の要する箱小入者ハ戴ふこととて
何りくやし婦人の商人ハありたり

又ハリテロープカとて此方の腰ヶケ茶屋
俵ひらのものありとと麥粉むぎこ野菜やさいをとりお
るを并な麩粉むぎこをとり店をヒローバノイラカ
こつ此方の朱店しゆてん同極どうごくのりおんがり布
帛肆びやくしゴヒチノイラフカといひ魚肆いさしと
バノイラフカといふ又魚をとりお柄かぢ入
省しやう小戴せうたいさしとと呼よ臘乾ろうかん箱はこ小入
ミンスくと呼よ花木はなぎを盆ぼん植うとりと板い

のせとトウカくといふ野や菜さいの籃らんおいさ
タラワくといふびわくかき又蜜みつを温ぬ
たるを柄かぢ入い擔かぢひととととといひ
うり先さき此方の醜みにくりものといふの
中なかヤリ牛うしの乳ちゆうをモロくといひて
先さき多く女にの商人しやうじんかき小こ柄かぢお
擔かぢ棒ぼうの細こき木きと鍋提なべての如ごとく撓たがり
後ご柄かぢをとりけお柄かぢ入い擔かぢ棒ぼう細こき

あらひて肩の痛の事なり
すくく商人とよくいふモナダと答ふ此
方をも何が所用なりといふ如し云葉
かりと云



